

『春香伝』と『浄瑠璃姫物語』の庭園描写

——四方四季をめぐって——

はじめに

語り物における類型的な叙述様式として重要な「物揃え」に着目しつつ、韓国の語り物文芸「春香伝」と、日本の「浄瑠璃姫物語」をとりあげ、その類似性と相違性について論じたことがある。ここでは、「春香伝」と「浄瑠璃姫物語」の両作品に頻出する物揃えを指摘し、さらに共通してみられる類型描写として、

- (一) 浄瑠璃御前・春香についての人物描写
- (二) 御曹司・李道令についての人物描写
- (三) 浄瑠璃御前・春香の屋敷と庭園の描写
- (四) 浄瑠璃御前・春香の部屋の描写

の四点があげられることを提示し、そのうちの「美人揃え」を主内容とする(一)項の女性の人物描写の種々相について、詳しく検討を加

えたのであった。

本稿では、恋の場面描写におけるきわめて特異なものと考えられる、(三)の浄瑠璃御前と春香の屋敷と庭園の描写について、見ていくことにしたい。主テキストは前稿と同じ「南原古詞」と「十二段草子」である。

一 泉水揃え

金売吉次の供に身を隠し東下りをしていた御曹司義経は、ようやくのことで矢作の宿に着くが、春の夜のおぼろ月をながめ立っていると、折よく長者の宿所より琴の音が響いてくるのであった。御曹司はその音にひかれ耳を傾けるといふ場面設定において、次のような長々とした屋敷の描写がみえている。

あるしを、誰とは、知らねとも、七間四面の、唐の御所、八棟

造りに結構して、東西両門飾らせて、樹木前裁、数しらす、軒の白梅、八重紅梅、一重桜、したり柳に糸柳、吹く春風にうちなひき、南おもての泉水には、たて石、ふせ石、流れ石、しよしをくらし忘る、石、五色石をは、落つる滝にそた、まれば。こい、ふな、をし、かも、月の影、波まをてすませける。

東おもて泉水には、千本の松を植へさせて、枝に遊ぶ、小鳥は何々そ、ひわや、極楽浄土ごくらや、四十雀、数の小鳥か戯れて、法華涅槃とさへつれば、極楽浄土と申共、是にはいかてまさるへき。

北おもての泉水には、玉かとみればたまも草、から竹、たいみやう、ひきかへて、枝ことに、鶯か巢をかけて、十二のこいこを育て、嘴をそろへて、さへつれば、心詞も及はれず。西を春かになかむれば、長生殿てはなけれども、流る、清水に落つる滝、州浜に池を掘らせつ、池の中に蓬萊・方丈・瀛州山として三の嶋をつかれたり。嶋の中に、一間四面の堂を建て、弥陀の三尊かけ奉る。百八千の花皿に、華瓶、香炉と、のへて、花の匂ひは退転なし。堂の回りに、植へをく花はなに／＼そ。

(以下花揃えの一文は省略)嶋と陸地のその間に、玉の反橋懸けさせて、けいとれいふの風吹けは、弘誓の舟をそ浮かへける。弘誓の舟の装束には、みくさひ、舳屋形、帆柱、棚板に至るまで、銀金で磨かせて、五色の綱を下けられたる。かの舟の漕き

手には、天より八人の神楽をのこか天降り、法華経の八の巻を帆にかけて、般若の風にそふかせける。かの舟の沖に漂ふその有様、心詞も及はれず。池の中には、四種の蓮華を放されたれば、打ち来る波も漚漚と、磯辺に、松杉ひき植へて、孔雀、鸚鵡か囀れば、極楽浄土と申とも、これにはいかて勝るへき。

これを見ると、浄瑠璃御前の屋敷の描写は、「七間四面の唐の御所、八棟造りに結構し、東西両門飾らせて」とあるという、家屋の建築様式と構造について簡単に述べたあと、庭園の景観を詳細に描くという内容になっていることがわかる。その叙述は、七五調の語り口調にのつた美文で、流れる如くに展開されており、典型的な「物揃え」の様式によっていることが知られる。この箇所は、本テキストには段名がないものの、他の伝本には「泉水揃え」或いは「花揃え」といった段名を付し一段を設けてあることから、物語展開での重要な箇所であったことがうかがえるのである。

さて、「南面の泉水には」「西をはるかにながむれば」「……小鳥はなにになぞ」「植えおく花はなにになぞ」などの語り出しの常套句をさしいれながら展開する泉水揃えは、花鳥風月・築庭のさまを修辭をこらし流麗に描くうちに、日本の風雅な庭園の趣を表現して驚嘆すべきである。その叙述方法のもっとも注目すべき特徴は、庭園の描写が南東北西の四方にわけてなされていることである。その

景観は、四方ごとに異なる内容となっているが、語りの順にそって掲げてみると次表のようである。

南	立石、臥石、流石、(忘る、石)、五色石、滝、鯉、鮒、鶯、鴨、月の影
東	千本の松、鶺鴒・小雀・四十雀
北	玉藻草、から竹、大名、鶯の巢と十二の卵
西	滝、洲浜、池、蓬萊・方丈・瀛州山の三の嶋、嶋の中の堂、弥陀の三尊、百八千の花皿、華瓶、香炉、せたい樹・菩提樹・こうたら樹・柚の木・柑子・橘・梅・桔梗・刈萱・女郎花・あじさい・下野・岩つつじ・黄菊・白菊・重ね菊・唐梅・唐撫子・なつめ・夏百合・夏小萩・浮草・せきせき菖蒲(以上は花揃え)、反橋、けいとれいふの風、弘誓の舟、舟の装束(みくさひ・船屋形・帆柱・棚板・五色の綱)、八人の神楽をのこ、法華経八の巻、般若の風、蓮華、松、杉、孔雀、鸚鵡

表から、南面には石や魚、東面には松と鳥、北面には竹や鶯の卵などであるが、最後の西面の描写に至っては、その事柄の豊富なことと一目瞭然で、西面に重きの置かれていることがわかる。具体的に見てみると、池の中の堂にかけられた阿弥陀三尊と百八千の花皿・華瓶・香炉、草花の数々を列挙した花揃え、そして反橋や弘誓の舟とその装飾のいろいろと、これら一連の物揃えは結局、池をめぐる景観であることに気づく。日本の伝統的な庭園では、池泉庭様式が特徴的なものといわれており^④、ここに描き出されたものはまさに

くそのような庭園であろうが、池につづいて蓬萊・方丈・瀛州の三の嶋を取りあげていることは重要である。蓬萊・方丈・瀛州山といえば、神仙の住む「三神山」で中国の神仙思想にもとづく不老長生の楽園的仙境である。日本の庭にこれが置かれたのは古く、平安時代の「作庭記」「山水並野形図」から江戸期の「諸国茶庭名跡図会」に至るまで見えている^⑤。三の嶋は実際の作庭での重要なモニュメントとしてあつたわけで、ここでは、浄瑠璃御前の屋敷の庭園に仙境的雰囲気をもたらし出す景物となっているのである。

神仙思想とともに目につくのは、もつとも描写の詳細な西の面に、仏教に関する事柄が集中して多いことである。阿弥陀三尊や弘誓の舟、法華経の八の巻はいうまでもなく、吹く風にも「けいとれいふ」「般若」という名をつけるといった具合で、加えて東面にある「鳥揃え」というべき一文では、鳥の名の列挙につづいて「数の小鳥が戯れて、法華涅槃とさえずれば、極楽浄土と申共、是にはいかでまさるべき」と結文している。鳥の鳴き声を法華涅槃にたとえているわけである。さらにはまた景観を描いた最後に、「……極楽浄土と申すとも、これにはいかでまさるべき」と賞讃しつつ泉水揃えを終えていることからそれはいえる。阿弥陀仏は浄土教の本尊として西方極楽浄土にあつて法を説く仏であつてみれば、それが三の嶋の御堂に安置されるを描き、かつその美観を八功德水の池や極楽

浄土にたとえているこの泉水揃えは、浄土庭園^⑧とでもいふべき景観を描き出しているわけである。これが「西」面に描かれていることは仏教思想からして当然のことと理解できる。

先の神仙思想と併存・混在するこのような仏教色は、日本庭園の特徴として指摘される習合性^⑦からすれば至当なことといえようが、西面を極端に詳しく描くことの説明は、それだけではつきにくい。ところで、「浄瑠璃物語」の創作と伝播に、比丘尼や巫女のような女性の唱導家に関係したことはすでに説かれている^⑥。とすると、この物語を語り持ちはこんだ管理者、伝播者といった側面から考えるならば、女流の唱導家・芸能者がこのような仏教色の形成に大きくかかわったからではないかと思われるのである。

二 泉水揃えの方法

さて、「十二段草子」の泉水揃えでもっとも重要なのは、南東北西に分けた描写が四季の別を明確に示していないことである。四方に四季を描く趣向は中世の作品にとりわけ多くみられるが、庭の景観を描く例としてよくあげられる舞曲「八島」^⑨をみると、奥州の佐藤兄弟の館はこう描かれている。

……堂の辺りには四節の四季をまなぶ。先ず東は春に似て、大
ゆう嶺の梅の花、昔ながらの山桜（略）……いつも春かと思え

【春香伝】と【浄瑠璃姫物語】の庭園描写

にけり。南は夏に似て、州浜に池を掘らせたり。池のその中に、蓬萊、方丈、瀛州とて、三つの島をぞ築かせたる。島より陸地へは反橋をかけさせ、橋の下には浦島太郎が釣舟、童男、卯女がうつほ舟を、五色の糸にて繋がせて、常楽我浄の風吹かば、汀へ寄れと繋いだるは、いつも夏と見えにけり。西は秋に似て、四方の梢の色つき、白菊絶えぬ風情。北は冬かと打ち見え、山岳は峨々とそびえたり。売炭翁（ばいたんおきな）は、おのが衣は薄けれど、冬を待つこそやさしけれ。冬にもなれば、炭を焼く炭竈の煙（けぶり）の青うて細く立ち上るは、いつも冬と見えにけり。（付録引用者）

付録の箇所にも明らかなように、「東は春に似て」「南は夏に似て」「西は秋に似て」「北は冬かと打ち見え」と本文そのものに方位と季節を明示し、季節推移の順に挙げている。また浦島太郎が見た龍宮の景観は、御伽草子「浦島太郎」^⑩に

まつ東の戸をあけて見れば、春の景色とおぼへて、……
南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、……

西は秋とうち見えて、……
さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、……

とあって、やはり四方に季節を示しているのを見る。さらにもう一例、「浄瑠璃姫物語」のなかにあるいま一つの趣向、四方の障子の

絵揃えの本文をとりあげると、

東を春の柳……春のていとぞ見えたりける

南を夏とながむれば……まこと夏とぞかいたりけり

西をはるかにながむれば、秋のていかとうち見えて……秋のていとぞ見えたりけり。

北をはるかにながむれば、冬のていかとうち見えて……是は冬とぞ見えたりける。(「十二段草子」の場合)

とあって、四方に四季名がはつきりと示されている。描かれる景色も日本の四季おりおりの典型的なものとなっている。

方位に季節を対応させるのは、

東——青——春

南——赤——夏

西——白——秋

北——黒——冬

中央——黄——土用

という陰陽五行思想の配当にもとづくものである。上述の三例がこのパターンにきれいに対応しているのに比べ、「十二段草子」の泉水揃えでは、その関係は必ずしも明確ではない。まず何よりも「南東北西」に季節名を示していないこと、その移っていく順序が、春夏秋冬の季節推移とはそぐわないものであることが指摘できる。また

西面での花揃えに列挙された花の名が必ずしも秋咲きのものではない点もこれを補強するものである。語り物の詞章に撞着や矛盾はつきものだとしても、冬を描くべき北面に霜や雪、氷の見られないのも納得できないところである。となると泉水揃えは、四方に四季を配した叙述とはいえないことになろう。全体として庭園の四季における景観のあれこれを描いているとはいえても、東面に春を、南面に夏を、西面には秋を配して描くという叙述方法は見出し難いのである。では、このことが「十二段草子」だけのものなのかどうかについて、特に東西南北四方の順序、仏教にかかわる事柄などの異同に主眼をおいて、諸本に確かめつつ探ってみることにする。というのは、「物揃え」という語り物に特徴的な様式について考える場合、一伝本の内容だけをもって云々するのは、ある一側面だけの指摘におわることもあってはなはだ危険だからであり、むしろ諸本での物揃え文を対照しその変化の種々相を見てこそ、語り物の本質にせまることができると考えるからである。

	方位順	長文箇所	仏教とかかわる語
A 十二段草子	南東北西	西	
法華・涅槃・極楽浄土・弥陀の三尊・花皿・華瓶・香炉・八功德池・宝蓮華・けいとれいふの風・弘誓の舟・法華經の八の巻・般若の風・極楽浄土			

B	山崎旧蔵写本 ¹²⁾	東南西北	西 華嚴・阿舎・俱舎・唯心・弥陀の三尊 ・鈴・独鈷・八功德池・宝蓮華・常楽 我常の風
C	慶長古活字本 ¹³⁾ 寛文江戸正本 ¹⁴⁾ 北海道大学本 ¹⁵⁾	南東北 南東北 南東北	南 南 南 羅漢石・八功德水・宝蓮華・極楽世界
D	赤木甲絵巻 ¹⁶⁾ 赤木乙絵巻 大鳥本絵巻	南 南 南	阿弥陀三尊・八功德池・弘誓の舟・廿 五の菩薩・法華経の八の巻・般若の風 ・極楽浄土
E	山岸文庫蔵本 ¹⁷⁾ 班山文庫蔵本 ¹⁸⁾	なし なし	

右表からわかるように、A Bは四方位を具備しているが、Cでは西が欠け、Dでは三方位が欠けてしまっている。つまり四方をすべてもつのはA Bだけということである。特にBの方位順の東南西北は注目される。Bは伝本中最も古態を示すといわれているが、方位順が春夏秋冬の変化と見あっている点は他に見られないものである。次に目につくのはAやBは西面が長文でかつ仏教色の濃い内容であること、これに対しCは南面が長文でかつ仏教色がほとんど見られないことである。三の嶋はあっても弥陀三尊は抜け落ち、極楽浄土の語は極楽世界へと変じ、さらに西面そのものの言及がないという

大きな違いを示している。こうみてくると、長文の箇所が「西」から「南」へと変わっていることと、仏教色の希薄化とは、相見あう変化であると思われる。

というのはAやBは西面に三の嶋や堂、阿弥陀三尊など仏教と関わる景物を語り、いわば浄土庭園を描こうとしているわけで、従っておのずと西方極楽にあたる西面にそれを描くことになったと理解されるからである。ここで日本の庭園は家屋の南面におかれるのが常であることを思い起こすなら、南面に重きを置く泉水揃えがあるのも充分うなずけるはずである。C Dがまさにその事例であって、南面に大きくとられる実際の庭園のありようがこうした変化を促したのではないかと思われる。Cのうち慶長本は語りが人形操りと合体した頃の伝本であろうとされており、寛文本は古浄瑠璃時代の大夫の語った正本で江戸初期に定着していた「浄瑠璃物語」の姿を見せる伝本²¹⁾であつてみれば、宗教色の希薄化は人形浄瑠璃の成立や時代の好尚にそつたものであつたらしい。

Dは南面のみを取りあげており、方位の取りあげ方そのものはCの一步進んだ縮約形といえるが、内容ではAの南面と西面とを合わせたものになっており、AやBなどを踏襲したものであるらしく、Cとはやや趣を異にしている。南面だけを語るのには、絵巻という形態のもつ視覚重視の享受方法からくる改変とも思われるが、後考に

まつべきであらう。

以上みてきた諸本での異同を勘案してみると、A Bのように西面を重視した仏教色のこいものが、それにこだわらず庭園の南面を重視するCやDの形態へと変わっていったらしいこと、さらにEのように、江戸もかなり入った頃にはもう泉水揃えは語られなくなつたということがいえるのである。つまるところ、仏教思想にのつた詞章が突ききずされていったという語りの「可変性」が、ここに見えてくるのである。語りの管理者・伝承者、或いは時代の嗜好性など、実際の語りの場と過程の中で淘汰されていくという、語り物の本質が指摘できるであらう。

ともあれ「十二段草子」の泉水揃えは、築庭の結構の壮麗さと花鳥風月の風情をみごとに描き出すものであった。それはこの世になり理想境を、極楽浄土にも遜色ない楽園を造形するものでもあった。浄瑠璃御前の屋敷に御曹司がかいま見、窺き見たのは、かくの如き庭園であつたのだ。

三 チナチレ

南原の名勝地広寒楼で春香を見染めた李道令は、その夜、春香の屋敷へと忍び入ることになる。下僕の房子（パンジャ）に案内させ、首尾よく屋敷内に入った李道令の目の前には、

……左右の方をよくみれば、屋敷の結構も輝くばかりなり。大門扉の左右には、蔚遲敬徳、陳叔宝が、中門には魏徴先生（が貼られたり）。四面にひらいた高き家は、口の字形に築きしが、上房三間、二つ並んだ壁蔵（納戸部屋）に、夾房（脇部屋）二間、大庁（板床広間）六間、越房四間、台所三間、物置五間、チュンジブ四間、大庁の観音開き戸、張り出し縁側にサルミの飾り格子窓、横渡しの丸い桁、扇形の軒隔木、柱頭にひえん垂木の飾りをつけて、みめよく建ておきたり。東の方には納屋があり、西の方には馬屋なり。陽地に白かけ、陰地に井戸掘り、門前の糸柳、長く伸びたる松の枝、狂風にゆらりゆらりと舞いをまい、前庭に犬を飼い、後庭に鶏を飼い、竹を植えて垣牆とし、松を植えたは亭子（あづまや）なり。桑を植えて蚕をそだて、牆の下に蜂の巣つくらせ、牆の外には瓜畑、庭の下方に蓮亭築き、熱石にて四面をきつちりしつらえて、池のまん中に石飯山を、一層二層三四層と、絶妙に築きおき、つがいの鶯鳥にみさご鳥、平鉢のごとき金魚は、池の中に戯れ泳ぎ、あらゆる花草のみな咲きたり。東に碧梧桐、西には白菊、南に紅牡丹、北には金糸烏竹（黒竹）がゆつたりと、まん中には黄鶴翎、月桂、四季、棕櫚、芭蕉、芍薬、映山紅、倭つつじ、連抱桃花、菊花に梅花を、そちこちに植えおきて、鸚鵡、孔雀、青鳥二羽

はたよりを伝えて、合歡草と連理の枝の比翼鳥もむつまじい。

日よけの桐すだれ、軒にはそれぞれ玉風磬をつるしたれば、清風さつと吹くたびに、ちりりんりと、その音もにぎやかなり。

という春香の屋敷の、まことに冗長なるチヲチレが展開するのであった。

「左右の方をよく見れば」という場面描写の常套起句にみちびかれて、屋敷の構造と建築様式が最初に、つづいて庭園のありさまがこと細かに描かれており、「十二段草子」と同様の方法が見うけられるが、犬や鶏を飼っていること、桑の木と養蚕のこと、さらに園頭（瓜・西瓜などの畑）や池の金魚、軒の玉風磬のことなどは特に先の泉水揃えに見られない朝鮮の庭園の趣が感ぜられるものといえよう。『南原古詞』は「春香傳」の諸本中でも長文のものに属し、広大の演唱する唱本そのものでは勿論なく、語り本というよりは読み本ともいべき伝本であるが、その享受方法は現代小説を「読む」のそれとは異なり、なんらかの旋律なりリズムなりを伴ったものであったと考えられる。従ってその詞章にパンソリ辞説ソリと共通するものが多く見受けられるのも当然である。事実、現在のパンソリ演唱でチヲチレの箇所はチニヤン調で語られている。チニヤンの長短チヤン（リズム・拍子）は、莊嚴でおだやかでゆったりとした情景を表す時に用いられるもので、庭園の風雅な様子を描くのにまこと

にふさわしく、チヲチレなど物揃えの部分が音曲にのって語られるということが確認できる。

ではまず屋敷描写を見ていこう。家を口の字の形に建てるのは、伝統的な朝鮮の家屋の様式であるが、大門扉の左右に蔚遲敬徳や陳叔宝の書画が貼つてあるというのは何であろうか。朝鮮の歳時風俗を記した『東国歳時記』²⁰の正月元旦の項に「門排」（ムンベ）の記載がある。これは所謂守門画のことで、正月に將軍像や鐘馗、蔚遲敬徳や陳叔宝の画を門の両側に貼ることで、「辟邪瘟」し、災厄悪疾を防ごうとしたとある。伝統的な朝鮮の門の装飾のありようがかがえ興味深く、これなど前述の泉水揃えには見あたらない点である。また陽地と陰地に分ける描写も独特のもので、風水地理説からきた方法と思われる。つづいてチヲチレは、さまざまな部屋の名とその間数を示して一つ一つ並びたて、はたまたサルミ（柱の飾り）の飾りの意匠、桁、隅木、柱頭にいたるまで取り挙げ列挙しているが、家造りの部分を個々挙げていくこのような物揃えは、「みごとに築かれたり」とほめる最後の表現から考えても、それが家讚めの詞章であることは間違いない。

築庭の中では、何よりも蓮池とその中に据えてある石仮山（石の築山）について注目すべきである。朝鮮半島における庭園の歴史は古いが、その古い記録の一例として次を挙げておきたい。『三國史

記「百濟本紀・武王三十五年三月条に

穿池於宮南。引水二十餘里。四岸植以楊柳。水中築島嶼。擬方丈
 仙山。^{②③}

という記載がある。つまり、王の宮殿の南に池をうがち、二十里余りも水をひきいれ、池の四方の岸には楊柳を植えたといひ、さらに水の中には島を築いたが、それは方丈の仙山を擬したものだといふのである。百濟の武王宮殿の築庭のさまを簡潔明瞭に描いた貴重な一文であるが、池に方丈の仙山があるのは言うまでもなく神仙思想によるものである。これは「南原古詞」での石仮山と同じ様式であり、その淵源ともいふべきものであろう。つまり池の中の石仮山は、「仙境」を表す重要な庭園の景物であつたわけで、チフチレの中に置かれることで庭園の仙境的雰囲気をかもし出す役目を果たしていると考えられるのである。しかしながら、神仙思想は見えていても「十二段草子」の泉水揃えでのような阿弥陀三尊の御堂や仏教的裝飾の類は見られず、仏教的粉飾のないチフチレである。春香の屋敷の庭園は、仙境の如くに描かれているのであつた。

四 チフチレの方法

浄瑠璃御前の庭園は、すでに検討したように東西南北の四方に分けて描くという方法を示していた。ところが「南原古詞」の春香の

庭園描写は、それとはまた異なつたありようを見せている。つまり四方に分けて描くのではなく、門前・前庭・後庭、あるいは垣の下の垣の外といった宅地内での位置や場所から分けて描くという方法が見出せる。他伝本にも

別春香伝^①

東の方・西の方・前庭・後庭・草堂の前・蓮

池の上

李古本^②

門前・東の方・西の方・客間の前・池のまん

中

烈女春香守節歌^③

後苑・右の方・窓の前・石段の下・池のまん

中

高麗大学蔵本^④

東の方・西の方・後苑・前面・庭の前

趙唱本^⑤

左の方・右の方・庭の下方

のような語り分けがあつて、全体から判断すれば、東・西（右・左）と前・後（南・北）という分け方が抽出できそうで、しいていえばまん中（中央）という視点もありそうである。つまりは東西南北と中央の五方に分ける方法の痕跡がそこに見出し得るといふことである。もちろん泉水揃えのように、詞章に方位名をすべて明確に示してはいないので、いうならば、方位と季節といふものにごしてこだわらない朝鮮庭園のありようが写し出されているといつておくべきかもしれない。

ただ注目すべきは、「花草プリ」という一文である。花の名をつぎつぎに並べたてる花揃え文であるが、そこには

東 — 碧梧桐 — 青色
 西 — 白菊 — 白色
 南 — 紅牡丹 — 赤色
 北 — 金糸烏竹 — 黒色
 中央 — 黄鶴翎 — 黄色

のような花の配置が見られる。特に、東西南北のみならず中央も示されているのを見過ごしてはなるまい。東には青色のおお桐、西には白色の白菊といった具合に、各方位にみあった色の配置がされており、まさしく陰陽五行思想によった花揃えなのである。諸本にも

李古本	東京大学蔵本 ^②	京板十六張本 ^③	京板三十五張本 ^④
東・キイ雪白	東・碧梧桐	東・梅雪白	碧梧桐
南・赤芍薬	南・紅牡丹	西・白鶴翎	白牡丹
西・白鶴翎	西・白梅花	南・紅鶴翎	黄薔薇
北・金糸烏竹	北・金糸烏竹	北・金糸烏竹	紅芍薬
中央・黄鶴翎	中央・黄鶴翎	中央・黄鶴翎	金糸烏竹

とあるのを見れば、花草プリにある五方の花揃えは、一つの趣向として語られていたことがわかる。花の名の配置は、北の金糸烏竹

を除いては各本さまざままで固定しておらず、こうした所にも語りの多様性が見てとれておもしろい。

ところで、『南原古詞』や十六張本での東西南北という順序に対し、李古本と東京大学蔵本での東南北西中央という順序はきわめて重要である。たとえば李古本では

花階（花壇）を見回せば、一層二層三四層と、花草の燦爛さよ。
 倭つつじ、さつきに鶏頭花、ほうせんか、牡丹、芍薬、くちなし（後略）

と花の名をずらずらと三十種近くも列挙した後、東南北西中央ごとの花を示すのであるが、その順序と花の色が五行の配当順であるところに本来的な姿が見い出せるからである。「春香伝」の「花草プリ」の箇所に、五方五色の描写方法はみごとにいきづいていたことが発見できよう。加えてこの趣向が、比較的新しい伝本である『烈女春香守節歌』や、現在演唱されている金素姫唱本、趙サンヒョン唱本の花草プリには見られないという点からしても、その古態性がうかがえるといえよう。

ところで、このような五方に花を配するのは、朝鮮朝時代の築庭植林の際の決まりであったといわれる。特に庭の樹木はその方位によって禍殃がきまるといい、たとえば李花は東に、杏花は北に、なつめは門庭の西の方というように、植える方位に注意をほらった

のであった。つまり朝鮮では宅地造営の際に風水地理説を重視するように庭園においてもまたそうであった。五方描写の背後には、季節よりも方位にこだわる朝鮮民族の思考があったわけである。

いずれにしても、五方描写をたもつ『春香伝』の庭園描写と、四方描写を方法としてもつ『浄瑠璃姫物語』の庭園描写、この二者の違いがまことに興味深く見出せたのであった。

五 庭園描写の伝統

庭園描写は「春香伝」だけでなく、朝鮮朝時代の小説にさまざまに見出すことができる。今それを詳述する余裕はないが、特にパンソリの作品から一例あげてみることにしよう。「雍固執打令」^{オシゴツクリン}がそれである。姓は雍（オン）、名は固執（コジブ、がんこ・へんくつの意）という主人公はその名の通りの頑固者。ことごとくにがんこ徹で暮らしていた。彼の暮らしはこう語られている。

（チュンモリ）

暮らしむきをみるならば、……前の庭には穀物の束を山のごとくに積み上げて、後ろの庭には牆の塀が高く築かれたり。垣の下に蜜蜂の巣箱おき、碧梧桐の木にて亭子（あずまや）とし、松柏の木植えては目かくしに、サラン（居間）の前に蓮池を掘り、蓮池の真ん中に石仮山をほどよい高さに積みおきて、その

上に一間の草堂を建てたるが、四すみに風磬つるし、にわか風
の吹きおこれば、ちりりんちりりん、澄みたるその音が聞こ
えくる。東の方の庭先の、牡丹の花は、つばみも半ばに開きあ
り、倭つつじ、さつきに鶏頭、ほうせんかを、四方に植えおき
たり。西の方の庭先のゆすら梅は、牆の内に美しく、映山紅に
紫山紅は、今まさに咲かんとし、梅に桃の花々も、季節めぐり
て満開なれば、サランのよそおいも輝くばかりなり。（朴東鎮
唱本）

これはまさしく庭園揃えである。牆、亭子、蓮池、石仮山、草堂、
風磬などは先述のチブチレに描かれた景物と同じで、短くはあるが
花草プリの一文もみえている。このあと部屋を結構を描く部分がつ
づいて語られているが、話の展開は、こうした裕福な暮らしむきに
反して、雍固執がいかに親不幸者であるかを、チニャン調の長短に
のせて悠々と語っていく。つまり

かくのごとくに富みて豊かなくらしをするも、当年八十の老い
たる母は、病みて床にふせてはいても、親不幸きわまる雍固執
めは、鶏一羽で奉養するなどんでもない、菓の一さじも与え
ずして、火をくべぬ冷たき部屋にて、朝のごはんに夕べはおか
ゆでもてなして、世間のそしりもなんのその、虐待かぎりをつ
くすのみ。

という親不幸のていたらくであった。物揃えのあとそれを転覆し逆転させる手法はパンソリの特性といえる滑稽化で、遊び心、遊戯精神の発露であることはすでに述べた。^④これなど日本の「物くさ太郎」の冒頭でのような滑稽さと相通じる事例である。ともあれ、チブチレが滑稽化に巧みに利用された一典型を、ここに見たわけである。もちろん春香の庭の描写と同じものではなく、『南原古詞』の庭園描写の方がその描写技巧にすぐれているのはすでに見てきたところである。しかし庭を描く骨子としての様式は共通しているのである。

つまりチブチレは家屋と庭園を描写する一つの趣向として、パンソリ周辺の伝承世界にあったことが知られるのである。

ひるがえって、日本の文学における庭園描写の伝統をみるとき、まず『宇津保物語』をあげることができる。吹上巻にみえる神無備の種松の邸宅は四方に四季を描いたものであった。紫式部が造形した『源氏物語』にみえる庭園もよく知られている。すなわち六条院は「春夏秋冬に配当した趣のある庭園、屋舎を営み、それぞれに、その季節を好む女人たちを配して住ませた」^⑤ものであった。

このようにその伝統は古く、中世に至ってはさまざまなジャンルに頻出する。^⑥たとえば軍記物語では『源平盛衰記』巻十一「経俊入布引瀧事」があげられる。とび込んだ滝壺の中で経俊が見たのは

「東西南北見まはせば、四季の景色ぞ面白き」庭であった。特に物語草子に豊富だといわれ、「田村の草子」「貴船の本地」「伊吹山絵詞」「ふせやの物語」「あじろの草子」など多くの作品に、仙境や龍宮、天上界、地下の異境などが、多種多様に描かれている。

それらに共通する表現なり決まり文句は多いが、わけても四方四季の方法は類型描写のなかでも一群をなすほどで、いかに愛好されていたかが推して知れる。自然を感得するのに繊細で、季節の風物、四季のうつろいを愛でた日本人であればこそ、四季の描き分けにすぐれていたのもまた当然かもしれない。『古今和歌集』の四季別の歌、また季語・季題なるものがそれを如実に語っているのである。

さらに文字からの感得にあきたらず視覚にそれを求めたのが、絵巻であり、奈良絵本であり、襖絵・屏風絵であったのだ。そして障屏画こそは室町文化を代表するものであった。

『浄瑠璃姫物語』は庭園描写だけでなく、四方四季の屏風絵（障子絵）をもあわせもつ唯一の作品である。泉水の美観に感嘆した御曹司は浄瑠璃御前の屋敷内で、四方四季の障子絵をながめることとなる。

記 本稿をなすにおいて向井芳樹教授より貴重な御助言をいただいた。ここに記して感謝申しあげたい。

注

- ① 拙稿「韓日語り物文芸における物揃え——「春香伝」と「浄瑠璃物語」の比較——」『同志社国文学』三四号、一九九一。
- ② 森武之助氏翻刻解題「十二段草子」大東急記念文庫叢刊別巻、汲古書院、一九七七。引用にさいして適宜漢字をあてた。金東旭氏他「春香伝比較研究」ソウル三英社、一九七九。本文引用は拙訳による。
- ③ たとえば山崎旧蔵写本には「四段せんすいそろえ、寛文初江戸はんきや又右衛門板には「はなそろへ二たんめ」とある。
- ④ 斉藤勝雄氏「日本庭園伝統の基盤」作庭技法集成第一巻、河出書房新社、一九七六。森蘊氏「日本庭園史話」日本放送出版協会、一九八一など参照。
- ⑤ 田村剛氏「作庭記」相模書房、一九六四。及び注④参照。
- ⑥ 長谷川正海氏「日本庭園雑考——庭と思想」東洋文化社、一九八三、九二頁。
- ⑦ 注⑥、七三頁。
- ⑧ 室木弥太郎氏「浄瑠璃物語と民間説話」『国語と国文学』一九五八、三月号。及び「増訂語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究」風間書房、一九八一、四三九、四五二頁。また加美宏氏「国府台戦記」小考——軍記の変貌と冷泉の物語『甲南国文』第二四号、一九七七。
- ⑨ 荒木繁氏他編注「幸若舞」2、東洋文庫、平凡社、一九八三。
- ⑩ 市古貞次氏校注「御伽草子」日本古典文学大系、岩波書店、一九五八。これに対して四方障子の絵揃えでは冬の景色に水・霜・雪が描かれている。
- ⑪ 横山重・信多純一氏編著「しやうるり十六段本」大学堂書店、一九八二。
- ⑫ 松本隆信氏校注「御伽草子集」新潮日本古典集成、一九八〇。
- ⑬ 横山重氏校訂「古浄瑠璃正本集 第二」角川書店、一九六四。
- ⑭ 横山重・松本隆信氏「室町時代物語大成」角川書店、一九七三。
- ⑮ 三本の絵巻とも注⑫の翻刻によった。
- ⑯ 鳥居フミ子氏「山岸文庫蔵「浄瑠璃姫」一冊」『実践女子大学文学資料研究所年報』第六号、一九八七の翻刻によった。
- ⑰ 高野辰之氏「日本歌謡集成」五、春秋社、一九二八によった。
- ⑱ 注⑫の信多純一氏の「研究篇」参照。
- ⑲ 横山重・太田武夫氏「室町時代物語二」古典文庫、一九五四の横山氏の解題。及び注⑬松本氏の解題参照。
- ⑳ 注⑭の横山氏の解題参照。
- ㉑ 欠落した理由は不詳であるが、四方四季の趣向を確固ともつ四方障子の絵揃えと重複したからではなからうか。
- ㉒ 「チブ」は家・屋敷の意、「チレ」は飾り・飾りたて・結構と訳せる。
- ㉓ 注②の金東旭氏の解題参照。また朴甲洙氏「景印「春香伝」」『朝鮮学報』第二二六輯、朝鮮学会、一九八八の解題も参照。
- ㉔ 注②及び、趙東一・金興圭氏編「パンソリの理解」ソウル創作と批評社、一九七八、「春香伝の総合的研究」ソウル亜細亜文化社、一九九一の各論稿などを参照。
- ㉕ 「パンソリタソツマダン」韓国ブリタニカ会社、一九八二の趙相賢唱本「春香歌」。趙氏は金世宗、パンの継承者である。
- ㉖ 朴憲鳳氏「唱楽大綱」ソウル国文学芸術学校出版部、一九六六。李輔亨氏「パンソリ辞説の劇的状況による長短・調の構成」『芸術論文集』第一四輯、一九七五、一四四頁。
- ㉗ 「朝鮮歳時記」『東国歳時記』ソウル東文選、一九九一。姜在彦氏訳注「朝鮮歳時記」東洋文庫、平凡社、一九七二の日本語訳がある。
- ㉘ 「三国史記」ソウル廣書出版社、一九七二。井上秀雄氏訳注「三国史

記」東洋文庫、一九八〇の日本語訳もある。

③⑩ 尹張燮氏『韓国建築史』ソウル東明社、一九七二、第二章「韓国庭園の特性」。なお伝統的朝鮮の家屋については次の日本語訳がある。『韓国の民俗文化財』民家篇、岩崎美術社、一九八九。

③① 「古小説板刻本全集」第五冊、ソウル羅孫書屋、一九七六。及び「別春香伝」『文学思想』第四〇号、ソウル文学思想社、一九七六。

③② 「文章」二卷一〇号、一九四〇。

③③ 具滋均氏校注「春香伝」韓国古典文学大系、ソウル民衆書館、一九七〇。

③④ 注③③に所収。

③⑤ 注②⑤に同じ。

③⑥ 注③⑩に同じ。また田中正大氏「方池に円島」の自然美——韓国庭園の印象』『月刊百科』No.274、平凡社がある。

③⑦ 注②④「朝鮮学報」の景印による。

③⑧ 注③③に所収。

③⑨ 「京板三十五張本（九州大学本）春香伝」『韓国学報』、ソウル一志社、第九輯による。

④⑩ 注②⑨に同じ、二八六頁。

④⑪ 李菊子氏「パンソリ研究」ソウル正音社、一九八七によった。

④⑫ 注①

④⑬ 池田亀鑑氏編『源氏物語事典』

④⑭ 市古貞次氏「中世小説の研究」東京大学出版会、一九五五。林昇平氏

「浦島と四季」「苦小牧駒沢短期大学紀要」第一九号、一九八七。徳田和夫氏「四方四季の風流」「お伽草子研究」三弥井書店、一九八八などを参照。なお四季を描いた庭園については外山英策氏「室町時代庭園史」

岩波書店、一九三四に詳しい。

「春香伝」と「浄瑠璃姫物語」の庭園描写